戦国出土資料と上古中国語声母研究（概要）

野原将揮

本論文の目的は戦国出土資料を用いて上古中国語―特に戦国期―の声母体系を再構することである。本論文は「はじめに」、「おわりに」と論文本体の 4 章からなる。

「はじめに」では§1「本論文の目的と基本原則」として、本論文の基本的な考え方について述べる。特に上古音再構を進める上での基本原則として、「Ⅰ．再構された体系が自然言語として不自然でないこと、類型論的に矛盾しないこと」、「Ⅱ．オッカムの剃刀」、「Ⅲ．仮説演繹法（Hypothetico-deductive approach）」、「Ⅳ.同時代資料―出土資料―の活用」、「Ⅴ．閩語との比較」、「Ⅵ．シナ・チベット祖語」、「Ⅶ. Minimal Old Chinese（OCM）について」述べる。従来の上古音研究では自然言語として不自然であり、類型論的に見ても支持されないような音韻体系が再構されてきており、本稿ではできる限り矛盾の少ないような再構音を進めている。

第 1 章では「上古音声母体系再構の歴史」と題し、清朝考証学から最新の研究までを簡単にまとめる。ここでは特に本稿と関連のある声母の研究を中心に紹介する。§1.1「清朝考証学者の声母研究」では主に銭大昕の研究を取りあげる。清朝考証学者以降は、§1.2「Bernhard Karlgren」、§1.3「董同龢」、§1.4「Sergej Jaxontov（Yakhontov）」、§1.5「Edwin G. Pulleyblank」、§1.6「李方桂（Fang-kuei, Li）」、§1.7「第一口蓋音化―河野学説―」、§1.8「第一口蓋音化―Axel Schuessler―」、§1.9「鄭張尚芳、潘悟云」、§1.10「William H. Baxter、Laurent Sagart」という構成で、Karlgren から近年の上古音声母研究までの大まかな流れについて紹介する。

特に Jaxontov による円唇母音（the rounded vowel）、円唇軟口蓋破裂音 KW の再構、二等韻への*-l-（本稿では*-r-）再構、董同龢による無声鼻音再構（*hm-）、Pulleyblank による L-type 仮説、河野六郎の第一口蓋音化説と言語層の違いの導入、Schuessler の第一口蓋音化説と方言差、潘悟云による喉音への口蓋垂音仮説は特に重要である。また 2014 年に発表された Baxter and Sagart（2014）には従来の上古音研究には見られないような手法や再構音が示されており、本論文中でも筆者の再構音とともに Baxter and Sagart（2014）の再構音を併記してある。

第 2 章「本論文の研究方法」では本論文の研究方法について述べる。§2.1「本論文の研究方法―仮借と通仮―」、§2.2「形声文字について」、§2.3「研究対象とする通仮例」、§2.4「諧声・通仮可能範囲」では仮借と通仮に対する本論文の考え方、そして仮借と通仮の範囲について簡単にまとめる。§2.5「戦国竹簡を研究対象とする意義」では、上古音研究の問題点を挙げるとともに、戦国竹簡の利点について述べる。

従来の研究では主に伝世文献が中心に扱われており、その結果、再構された音韻体系は多くの矛盾を孕んでいた。これは対象とする時代や地域が広すぎること、研究対象とする資料に後世の手が加えられていること等の問題に起因する。すでに述べたとおり、本稿の目的は戦国出土資料を扱って当時の声母体系の全体像を捉えることである。戦国出土資料のような考古学的資料を扱うことで、時代や地域をある程度限定して研究を進めることが可能である。具体的には戦国出土資料に見える通仮と称される当て字の現象を扱う（本稿では特に仮借と通仮の違いを区別しない）。たとえばある語を表す際に同音あるいは類音の字を用いるという通仮の現象を整理することで、当時の音韻体系の大まかな枠組みを知ることが可能である。第 2 章では戦国出土資料を扱う利点と、欠点についても述べる。

第 3 章「出土資料の通仮と声母体系」では各声母について論じる。§3.1「唇音 P（両唇破裂音）、鼻音 M」、§3.2「T-type（歯茎破裂音）と L-type（歯茎側面音）」、§3.3「牙音 K と喉音 H（軟口蓋破裂音・摩擦音と口蓋垂破裂音）、鼻音 NG」、§3.4「歯音 TS（歯茎破擦音と摩擦音 S）」について述べる。第 3 章では楚簡中に見られる通仮例を基に上古音声母体系を概観することを目的としている。

§3.1「唇音 P（両唇破裂音）、鼻音 M」では主に唇音の通仮例を挙げている。他の声母とは異なり、唇音に関して特筆することはないが、清朝考証学者らの研究成果と同様に軽唇音や舌上音等は出土資料の通仮からは確認されない。

§3.2「T-type（歯茎破裂音）と L-type（歯茎側面音）」については以下のとおりである：

（1）T-type と L-type

ここでは Pulleyblank（1962）によって示された L-type 仮説に対して、出土資料に見える通仮例から検討を加えた。Pulleyblank の仮説は主に諧声系列の分布に依拠し、中古音舌音（章組も部分的に含む）の語は少なくとも 2 種の上古音声母に由来するとされる。一つは端母 *t*-、知母 *tr*-、章母 *tsy*-と諧声関係を有するグループであり、本稿の T-type に当たる。もう一つは以母 *y*-、船母 *zy*-と諧声関係を持つグループであり、本稿の L-type に相当する。戦国竹簡にみえる通仮に検討を加えた結果、以下のことが明らかとなった：

戦国竹簡において T-type は T-type とのみ通用可能であり、L-type とは通仮しない。
戦国竹簡において L-type は L-type とのみ通用可能であり、T-type とは通仮しない。

この結果は、諧声関係の分布に基づいて示された Pulleyblank の仮説が妥当であることを示すものである。本稿では以下のように仮説を設けている：

【仮説 1】　戦国楚簡において T-type は T-type とのみ通仮可能であり、L-type とは通仮しない。同様に L-type は L-type とのみ通仮可能であり、T-type と通仮しない。

【仮説 2】　T-type と L-type は少なくとも戦国時代中頃にはまだ合流していない。

【仮説 3】　諧声関係を欠くため T-type か L-type かを判断することのできない語に関して、戦国竹簡で T-type と通仮する語は T-type と判断でき、L-type と通仮する語は L-type と推定することができる。

特に【仮説 3】を用いることで、従来の研究では復元の強度が低いとされる語の再構音の確度を高めることが可能である。たとえば「田」は中古音定母 *d-*であるため、その上古音は T-type（*dˤin）と L-type（*lˤin）の二つの可能性がある。そこで「田」の諧声関係を調べてみると、中古音定母 *d-*の「甸」があるのみであり、Type か L-type かを判断する基準である端母 *t-*・知母 *tr-*・章母 *tj-*・以母 *y-*・船母 *zy-*の語がない（以下、本文の表 3.2.4.1 より）：

表 3.2.4.1　「田」の諧声関係

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禅	書	船	以	邪
t-	*th-*	*d-*	*tr-*	*thr-*	*dr-*	*tsy-*	*tsyh-*	*dzy-*	*sy-*	*zy-*	*y-*	*z-*
		田 甸										

このように諧声系列上に手掛かりが無い場合、従来の研究では中古音から投影して再構せざるを得ないため、「田」は中古音定母 *d-*から投影して*dˤin のように再構される。しかしすでに述べたとおり、戦国楚簡において T-type と L-type は互いに通仮しないため、「田」の通仮関係を調べることによってその由来を明らかにすることができる（【仮説 3】）。そこで楚簡に見える「田」の通仮例をみてみると、「田」は中古音書母 *sy-*の「申」と通仮する。「申」はその諧声系列上に中古音以母 *y-*の「輾」があるため、L-type と考えられる。したがって戦国竹簡において L-type「申」と通仮関係にある「田」もまた【仮説 3】に基づき*lˤin と再構される。「田」と「申」の再構音は以下のとおりである（本文の表 3.2.4.2 より）：

表 3.2.4.2　「田」と「申」の再構音

	OC		MC			Baxter and Sagart（2014）
田	*lˤin	>	*den*	>	tián	*lˤiŋ
申	*hlin	>	*syin*	>	shēn	*l̥i[n]

§3.3「牙音 K と喉音 H（軟口蓋破裂音・摩擦音と口蓋垂破裂音）、鼻音 NG」では複雑な様相を呈す牙音と喉音に関して考察を加えている。牙音と喉音に関しては、研究者によって見解が異なる。これは諧声・通仮の原則に対する考え方の違いに起因すると思われる。以下の諧声分布を見てもらいたい（本文の表 3.3.1 より）：

表 3.3.1　牙喉音の諧声関係（古屋（2008:217））

	見 *k-*	渓 *kh-*	群 *g-*	疑 *ng-*	影 ʔ-	暁 *x-*	匣 *h-*	于 *hj-*
①	經	輕	痙	婬	莖	蛵	脛	
②		誇			汙	吁	鄂	于

「巠」を声符とする①は破裂音の見母 *k-*、渓母 *kh-*、群母 *g-*、影母*ʔ-*から摩擦音の暁母 *x-*、匣母 *h-*まで諧声関係を有す。②の于声も「巠」と同様に破裂音の渓母 *kh-*、影母*ʔ-*だけでなく摩擦音の暁母 *x-*、匣母 *h-*まで諧声関係を有す。このような諧声関係の分布に対して二つの見方がある：

① 破裂音と摩擦音の諧声関係を認める
② 破裂音と摩擦音の諧声関係を認めない

歴史的に見ても、多くの研究者が①「破裂音と摩擦音の諧声関係を認める」という立場から牙喉音を扱っている。たとえば李方桂（1971:8）の諧声原則には次のようにある：

（一）上古發音部位相同的塞音可以互諧。
(a)　舌根塞音可以互諧聲，也有與喉音（影及曉）互諧的例子，不常與鼻音（疑）諧。

李方桂（1971）に拠れば、調音点を同じくする破裂音であれば互いに通仮可能であり、舌根音に関しては喉音（中古音影母*ʔ-*と暁母 *x-*）と通用可能ということである。したがって殆どの上古音研究者がこの諧声原則に基づき中古音の破裂音（見母 *k-*、渓母 *kh-*、群母 *g-*、影母*ʔ-*）と摩擦音の暁母 *x-*を中古音から投影して、*k-、*kh-、*g-、*ʔ-、*x-のように再構している。

次に②「破裂音と摩擦音の諧声関係を認めない」という見解について。潘悟云（1997:10-24）は、破裂音は破裂音とのみ諧声・通仮可能であり、摩擦音とは諧声関係を有しないとの見解を示し、摩擦音を含む影組に口蓋垂音を再構する（本文の表 3.3.3 より）：

表 3.3.3　潘悟云（1997）「喉音考」

OC		MC	
*q-	>	*ʔ-*	影母
*qh-	>	*x-*	暁母
*g-（Type-B）	>	*gj-*	群母
*g-（Type-A）	>	*h-*	匣母
*ɢ-（Type-A）	>	*h-*	匣母
*ɢ-（Type-B）	>	*hj-*	于母

口蓋垂音という音価は親族関係にある言語との比較、『漢書』等にみえる漢訳語から得られた結果である。Sagart and Baxter（2009）、Baxter and Sagart（2014）も潘悟云（1997）の口蓋垂音仮説に一部修正を加えて採用している。本稿でも潘悟云の仮説に一部修正を加えて採用する。以下の表が本稿の喉音の再構音である（本文の表 3.3.6 より）

表 3.3.6　喉音の再構音

MC		OC	
影母*ʔ-*	<	*q(ˢ)-	Type-A Type-B
影母*ʔ-*	<	*ʔ(ˢ)-	
暁母 *x-*	<	*qh(ˢ)-	Type-A、Type-B
匣母 1 類 *h-*	<	*gˢ-	Type-A
匣母 2 類 *h-*	<	*ɢˢ-	Type-A
以母 *y-*	<	*ɢ-	Type-B
于母 *hj(w)-*	<	*ɢw-	Type-B

潘悟云の仮説と異なる点は、影母に*q-と*ʔ-を認める点、*ɢ-を于母 *hj-*ではなく、中古音以母 *y-*に対応する上古音へ再構する点である（本稿では具体的な例をあげていないが、*ɢ-に由来する以母 *y-*は出土資料中でもすでに確認されている）。

本節ではこのような牙喉音に関して、§3.3.1「牙音 K：牙音 K」、§3.3.1.2「牙音 K：牙音―合口」、§3.3.2「牙音 K：匣母 1 類」、§3.3.3「牙音 K：喉音 H」、§3.3.4「鼻音 NG：鼻音 NG」というように牙喉音の中でも特に議論の対象となるものに関して検討を加えた。牙喉音に関しては諧声原則に対する見解の違いが顕著であり、その結果、再構音に差異が生じている。いま見母 *k-*「景」と影母*ʔ-*「影」を例にすると以下のようにまとめることがで

きる（本文の表 3.3.5.1 から引用）：

表 3.3.5.1　**「景」「影」**

	景	:	影	
①	*k-	:	*ʔ-	牙音と喉音はある程度自由に諧声可能
②	*k-	:	*q-	調音方法（破裂音）が一致しているから諧声可能
③	*C.q-	:	*q-	語根の声母が口蓋垂音で一致しているから諧声可能

①から③になるにつれて、より厳密な諧声原則が採用されていることが分かる。本稿では②の立場から、牙音と喉音の再構を試みた。したがって本稿では軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音は基本的に自由に通仮できると考えている。

§3.4「歯音 TS（歯茎破擦音と摩擦音 S）」

歯音に関しては、特筆すべきことはないが、近年ではたとえば鄭張尚芳（2003:92）は「精組除心母字有一部分來源于 s 及 s 冠外，多数更是上古后期才成为塞擦音的」というように、精組 TS のほとんどが上古では破擦音ではなかったとしている。これは親族言語にある言語において破擦音が音変化によって生じたものであるという見解に基づいており、たとえば中古音精母 *ts*-には*ʔs-、*sl'-、*st-、*sq-、*sk-、*sp-、*sml'-等の上古音声母が再構される。しかし親族関係にある言語の破擦音が後の音変化の産物であるからといって、上古中国語に破擦音が無かったことの論拠とはならないはずである。本稿では鄭張尚芳（2003）のような仮説を採用せず、原則として中古の歯音と歯上音は TS、TSr と再構する。

第 4 章「無声鼻音 HN、preinitial *s-、書母 *sy*-の再構」では、§4.1「無声鼻音再構の歴史」、§4.2「preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構」、§4.3「書母 *sy*-の再構」、§4.4「「少」の上古音再構」について述べる。第 4 章ではより具体的な問題について検討を加えている。

§4.1「無声鼻音再構の歴史」

近年、上古音研究者の多くが上古音声母体系に無声鼻音の再構を認める。その根拠となるのが、以下に挙げるような諧声関係である（本文の表 4.1.1 より）：

表 4.1.1　**明母 *m*-と暁母 *x*-の諧声関係**

	MC	呉音	漢音
墨	*mok*	モク	ボク

黒	*xok*	コク	コク
毎	*mwoj*	マイ	バイ
海	*xojX*	カイ	カイ

このように中古音明母 *m*-「墨」は暁母 *x*-「黒」を声符としており、明母 *m*-の「毎」は暁母 *x*-「海」の声符である。このような諧声関係を説明するために、董同龢（1944:12-14）は無声鼻音[m̥]を再構し、*m̥- > *x*-という音変化を推定している。したがって中古音で暁母 *x*-に読まれる「黒」と「海」は*hm-と再構され、明母 *m*-の「墨」と「毎」は*m-と再構される。董同龢以降の研究者の多くが明母 *m*-と暁母 *x*-の諧声関係には無声鼻音*hm-（[m̥]）を推定する（本文の表 4.1.2 より）。

表 4.1.2　主な研究者の再構音―明母 *m* と暁母 *x*―

Karlgren	董同龢	Jaxontov	Pullyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳	BS
*xm	*m̥-	*sm-	*mh-	*hm-	*hm-	*hm-	*m̥-
二重子音	無声鼻音	二重子音	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	二重子音	無声鼻音

後の研究者は無声鼻音再構を泥母 *n*-と暁母 *x*-・透母 *th*-、疑母 *ng*-と暁母 *x*-の諧声関係まで拡げている。このうち多くの研究者が泥母 *n*-と透母 *th*-の通用関係を認めるものの、泥母 *n*-と暁母 *x*-の諧声関係を認めることに関しては消極的である。これに対して鄭張尚芳（2003）等は*hn-（二重子音）と*nh-（無声鼻音）を再構することで泥母 *n*-と暁母 *x*-・透母 *th*-の諧声関係をすべて説明するが、類型論的に見てこのような処置は受け入れがたい。本稿では Baxter and Sagart（2014）のように方言差を考えており，*hn-が中古音透母 *th*-へと変化した方言、暁母 *x*-へと変化した方言が存在したと考えている。これは「灘」のように中古音で透母 *th*-と暁母 *x*-の字音を有する語があることからも明らかである。

*hn- > *x*-という音変化を西方方言としたことに関しては、｛漢水｝を表す語が難声に作られることに依拠する。以下が、主な研究者の再構音である（本文の表 4.1.9 より）：

表 4.1.9　主な研究者の再構音

	明母 m- 暁母 x-	疑母 ng- 暁母 x-	泥母 n- 暁母 x-	泥母 n- 透母 th-	
董同龢	m̥				無声鼻音
藤堂明保	m̥				無声鼻音

Jaxontov	sm	sŋ		sn	二重子音
Pulleyblank	mh	ŋh		nh	無声鼻音
李方桂	hm	hng		hn	無声鼻音
Baxter	hm	hng		hn	無声鼻音
鄭張尚芳	hm	hng	hn	nh	hm-, hŋ-, hn-: 二重子音、nh-:無声鼻音
Baxter Sgart	m̥	ŋ̊	n̥	n̥	無声鼻音　n̥- > *x*-: West dialect

また本稿 4.1.3 等でのべたとおり、戦国期において無声鼻音の鼻音性は保たれていたと推定される。これはたとえば中古音明母 *m*-の「母」を声符に持つ「悬」が一方では中古音暁母 *x*-の「悔」や「誨」を表し、もう一方では中古音明母 *m*-の「謀」を表すことに基づく見解である。これと同様に「聞」あるいは「昏」は明母 m-の｛聞｝や｛問｝を表す。「昏」は中古音暁母 *x*-であり、仮にすでに摩擦音化していたとすると戦国竹簡で中古音明母 *m*-の｛聞｝や｛問｝を表すことはできないはずである。

これは*hn-についても同様である。たとえば上博楚簡『孔子詩論』第 10 号簡において「灘」は中古音暁母 *x*-｛漢｝を表す。その一方で、上博楚簡『性情論』第 15 号簡では「難」が中古音透母 *th*-の｛嘆｝を表す。したがって、*hn-も戦国時代には鼻音性を保っていたに違いない。仮に*hn-が *th*-へと破裂音化あるいは *x*-へと摩擦音化していたとすると、「難」で｛漢｝と｛嘆｝を表すことはできないからである。

このほか本稿では中古音徹母 *trh*-「丑」を声符に持つ「丑好」が中古音暁母 *x*-の｛好｝を表すことから、「好」にも*hn-を再構している。そもそも「好」は諧声関係を欠くためその字音を再構する手掛かりがないが、戦国竹簡において丑声字と通用関係にあることで再構が可能となった。

§4.2「preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構」では、「西」の音価再構を試みた。従来の研究では、「西」は再構の手掛かりを欠くため中古音から投影するほかなかった。本稿では「訊」の再構を通して、「西」に*sn-を認めた。

§4.3「書母 *sy*-の再構」、§4.4「「少」の上古音再構」では書母 *sy*-の再構と中古音書母 *sy*-の「少」の上古音再構を試みている。

諧声系列の分類によって、中古音書母 *sy*-は少なくとも 5 種に分類される。しかしすべての語が諧声関係を有すわけではない。本稿では出土資料に見える通仮を例に由来不明の書母 *sy*-の再構を試みた。特に上古の*ST に由来する書母 *sy*-は上記の T-type と関係があるため、【仮説 3】を用いることによって、その由来を確認することが可能である。

§4.4 では「少」の字音再構を試みている。「少」という表記が｛少｝の字音―すなわち

書母宵部に相当する字音―と｛小｝の字音―すなわち心母宵部の字音―を有しているため、研究者によっては書母 *sy*-の「少」と心母 *s*-「小」に諧声関係があるとするが、中古音書母 *sy*-と心母 *s*-は原則として諧声関係を有しない。本稿では「少」と T-type の「勺」に通用関係がみえることから、「少」を*ST-に由来する書母 *sy*-と考えている。

白一平（2010）は中古音書母 *sy*-に対応する上古音と閩語に音韻対応があるとして、上古の*ST-は閩語の無声無気破擦音 ts-に対応し、無声流音*hl-、無声鼻音*hN-は閩語の無声有気破擦音 tsh-に対応するとする。野原・秋谷（2014）ではこの仮説が妥当であることを明らかにしており、その結果、以下の仮説を示すことができる：

【仮説 4】閩語で無声無気破擦音 TS の場合、上古の*ST に由来する
【仮説 5】閩語で無声有気破擦音 TSH の場合、上古の無声鼻音、無声流音に由来する

そこで閩語における「少」の字音を確認すると、やはり無声無気破擦音で実現される。出土資料に基づいて再構された「少」の*ST-という再構音は閩語においても支持されるのである。このように閩語のデータを用いることで上古音の確度を高めることが可能である。

以上が、本論文の概要である。本稿では伝統的な手法―たとえば諧声系列の分類等―に加え、出土資料中での通仮字の振る舞いや閩語との対応関係等の様々な角度から複合的に分析を加えることによって、上古音再構を試みた。このような研究手法が今後の上古音研究が進むべき方向性であると考える。